



タイトル： ”父の愛をこの町に”

●東さんとの出会い

秩父別に入ると、そこは札幌とは違い、穏やかな雰囲気が町の中を漂っていました。普段私達が住む騒がしい札幌と比べ、ここ秩父別はまるで別の世界のように感じられました。この落ち着いている空気を吸い込んでこそ、私達は秩父別を実感しました。私達は、”秩父別のお父さん”と親しまれる東さんを訪ねました。



〈インタビュー後、東さんご夫妻との一枚〉

小ぬか雨の降る田舎の小さな商店。そこに入ったとき、まず目に入ったのは懐かしいペプシマンのフィギュアと壁に飾られた町からの数多くの感謝状でした。所々に見える懐かしい駄菓子の趣や色褪せたポスターに、私達はまるで20年前へタイムスリップしたような感覚を覚えました。少し進むと、寂れたカウンターに座る少し怖そうにも見えるご主人が団扇をバタバタと仰ぎながら私たちを出迎えてくれました。インタビューを始める前に、商店の仕事を手伝いたいと申し出ると、東さんは塵をひねながら、

「今日は暇だからすることないけどな」

と繰り返し言うだけでした。結局、私達は商品の陳列や値札を貼るといった簡単な仕事を任されたのですが、一方の東さんは店内ををあちこち動き回ったり、突然店の外に飛び出して行ったり、ほんの数分前に暇と言っていたのが嘘のようにとても忙しそうでした。お手伝い中、やり取りを重ねていく中で、一見怖そうな顔つきの東さんは、実はかなりの恥ずかしがり屋さんで愛のあふれる人なのだろうと勝手な推測が膨らみました。

● 地域の人々の交流の場



多文化交流科目〈田舎に行こう！ ライフストーリーインタビュー〉
(7) 東さんのちっぽストーリー

私たちが商店を訪れたとき店内には既に一人のお客様がいらっしゃいました。その方は東商店の奥様の同級生だと聞きました。その方と奥様は久々の再会を喜びながら談笑し楽しんでいました。彼女の帰り際に奥様はおもむろに店内の商品を手に取り、それらを袋に詰めたのち彼女に手渡しました。

「これ持ってって。」

「いいから、お金払うよ。」

「何言ってるの、いいから持ってって。」

といったやり取りを何度も繰り返している二人の姿は実にほほえましいものでした。



秩父別町においてこの東商店はまさに「地域の交流の場」なのです。この温かい光景を目の当たりにして、事前に用意していた「東商店とセイコーマートとの関係」についての質問はいささか愚問だったのかもしれないと感じました。東さんご本人もおっしゃっていた通り、東商店とセイコーマートではそもそも規模も役割も違います。この地域における東商店の役割とは、商品を販売することだけにあるのではなく、むしろそれ以上に地域の人々をつなげることにあるのです。インタビューの中で東さんが「セイコーマートをライバルだと思ったことはない。」とおっしゃっていましたが、これは、東商店のそういった役割を無意識ながらも自覚していたからこそ出た言葉なのでしょう。

● 秩父別への思い

しばらくして東さんが店に戻りました。私達は予定通り東さんへのインタビューを始めました。まず私達は、若き日の東さんを知るべく、様々な質問をしました。「生まれてからずっと秩父別で育ったんですか。」と聞くと「いや、高校は深川で、大学は神奈川だよ。」とおっしゃいます。私たちは正直驚きました。都会の暮らしを知ってもなおこの町に帰ってき



たのには何か理由があると感じたからです。さらに質問を続けました。

「なぜ秩父別に戻ってきたんですか。はじめからお店を継ぎたいと思っていたんですか。」

「うん…はじめから継ぐつもりはなかったな。なんとなくここに帰って、なんとなく商店を継いだんだよ。」

私たちは考えました。果たして、この「なんとなく」は本当に「なんとなく」なのかと。一度秩父別から離れ、外の世界を見ているはずなのに、それでも秩父別に帰るのはなぜだろうと。きっとこれは秩父別町に対する愛着ではないでしょうか。まるで鳥のように、広い世界を見ても、最後はやはり自分の巣に戻ってくる。秩父別はそう人々に思わせる愛しい町なのでしょう。

実際に「秩父別に住んでいてなにかいやなところがありますか。」と質問しても、「いや…ないかな…」と言うだけであまり否定的な言葉は出てきませんでした。もちろん秩父別町は素晴らしい町ですが、札幌などの都会と比べれば多少不便を感じていても何の不思議もありません。それでも嫌なところ一つないというのはおそらく嫌なところもそう感じないほどにこの町の全てを受け入れ愛しているからこそでしょう。秩父別への深い愛情が私達にも伝わってきました。



● 東さんにとって「町の祭り」とは

続けて私達は秩父別のお祭りについて質問をしました。東さんは「お祭りといってもほぼビールパーティーのようなものだ。」と嬉しそうな表情で語っていました。町中の人々が一堂に会するこの祭りを非常に楽しみにしている様子でした。このお祭りではビールやその他の飲み物を準備するのがこの商店の仕事だそうです。特に8月のとんでん祭りでは、なんと300Lもの飲み物を用意するそうです。東さんにとって、この祭り、ひいてはここで果た



「自分の仕事が生きて甲斐であるかのようにも感じられました。お祭りについて話す東さんはどこか誇らしげな表情を浮かべていたようにも見えました。」



● 秩父別の今と昔

「次は、昔と今とで秩父別の何が変わったかを教えてください。」

「大分変ったな。」

そうつぶやく東さんの表情にはもの悲しさを感じました。

「そうだね…昔はいろん店があって、靴屋や本屋とか…」と昔の秩父別の姿を思い返しながら、「今は寂しくなったな。」とやはり寂しそうに語る。

「家も減っていて…あっ、でも農家の子供は帰ってくるね。」と団扇を仰ぐ手が止まる。表情が明るくなる。さらに続けて、今の秩父別町は子供連れの若い夫婦にとってはとても優しい町だと東さんは嬉しそうに言います。ここ秩父別町は若い人を引き寄せるために様々な政策に取り組んでいます。昔の活気を取り戻すために、この町、そして町の一人ひとりがそれぞれ努力をしているのです。

私たちはインタビューの冒頭で東さんがご家族について語っていたことを思い出しました。東さんは、今は秩父別を離れて暮らす二人の娘さんに対して「秩父別には仕事がないから戻ってなくてもいい」と語りましたが、実は心のどこかで娘さんたちをこの町、この商店に引き戻したいと思っているのかもしれません。「若い人の力が欲しいんだ。」と小さく呟く東さんの姿からはそう感じずにはいられませんでした。

インタビューが終わった後、私達は、お祖父さんの代から 100 年以上も続く歴史の詰まったこの商店の中を案内してもらい、様々なことに思いを巡らせました。地域のコミュニティの場としての東商店を切り盛りし続けることは、実は彼のある願望と繋がりがあるように思えます。東さんは、秩父別の将来のためはもちろん、彼の大事な二人の娘さんのためにも頑張り続けなければならないという思いを抱いているのではないのでしょうか。そして、懐かし



多文化交流科目〈田舎に行こう！ ライフストーリーインタビュー〉
(7) 東さんのちっぷストーリー

さを感じるその商店の趣は、いつか娘さんたちが戻ってきた時、変わってしまった故郷に気詰まりを感じさせたくないからではないでしょうか。遠い所から帰ってくる彼女たちのために馴染みがある物をそのまま残している。私達はそれぞれに帰り道の傘の下で、静かに思いを馳せるのでした。

● 編集後記

インタビューの際、私たちの中の一人が「(水やお茶よりも)秩父別町特産、赤ずきんちゃんを飲みたい。」といういささか図々しいお願いも、快く引き受けてくれた東さんご夫妻はまさに人とのつながりを大切にしてくれる心温かい人なのだと身に染みて感じました。本当にありがとうございました。



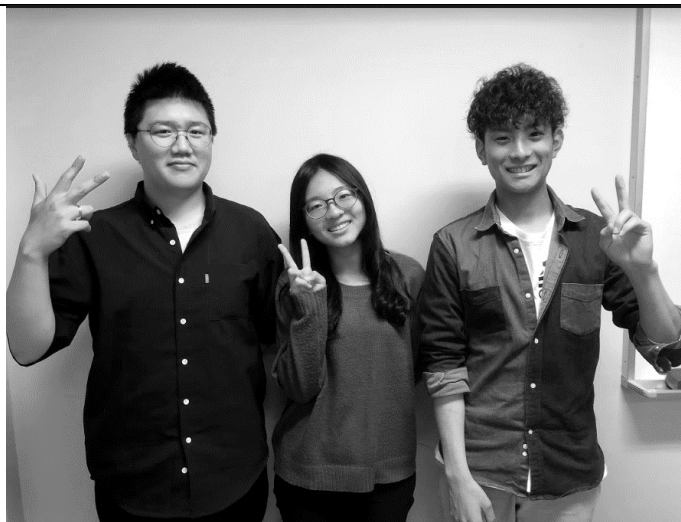
私たちが選ぶちっぷべつ写真

なし



担当者紹介：

- ① 名前（出身） ②学部 ③私はどんな人？ ④ 私が感じた秩父別を一言で



左から

①ユソン（韓国出身）

②交換留学生

③こう見えても今年 25 です。

④出会いの場、ちっぷべつ

①ジャイー（台湾出身）

②交換留学生

③英語・中国語・日本語を操ります！

④人がつながっている、ちっぷべつ

①たかき（仙台出身）

②法学部

③もうすぐ 20 歳を迎えます。

④“オオカミ”はいないけど“あかずきんちゃん”がいる町、ちっぷべつ